

ドイツ語教授における發音の問題

塩 谷 饒

I

„ドイツ文の意味が取れる“ ようにしてやろうと言うのが、我國のドイツ語教育のあり方である。これは明治以來の教育の傳統であるが、我國の文化事情の然らしめる所であるから、今後もこの線がくずれることは豫想できない。戦後の學制改革による學習年限の短縮と授業時間の減少は從來にもまさる速成を要求している。そこで我々が毎年繰返しているように、一學年では讀本や文法をなるべく早く仕上げて新しい讀物に移り、どれ位讀めるものかを吟味しつつその學年を閉じる。二學年では多くの場合前學年で擔當しなかつたクラスにドイツ人でも程度の高いとする文書をあてがい、一年に數種の文體に親しませ、その後は専門書は讀めるはずだとする次第。これでは教育の効果があがらないと言う聲が度々聞かされる一方、この制度のもとでよくこれだけ讀めるものだという聲もある。制度の不十分を自らの努力で補つた少數の熱心な學生が存在するわけであろうか。それに教科書には詳しすぎる程の註がついているし、雑誌は手軽に手に入るし、好みに應じた参考書は發行され、數種の辭書は便をせり合つている。それらの活用がうまくゆけば、教師を一應満足させる讀書力が養える筈かも知れない。

ところで元來専ら教場における訓練を必要としながら、しかも事實においては教授にあたつて餘に留意されずに放つておかれるものは發音の問題である。19世紀末から20世紀はじめにわたつて歐洲各地にあげられた“語學教授改革”の聲は我々になじみの深い音聲學者である Vietor や Jespersen らによつて主唱されたものであつたが、要は本來の言語たる音聲言語を重要視し、なるべく翻譯に頼らず、直觀を利用して言語を自づから會得させようとするにある。我々もこれが語學教育の理想であると思いつつも、短時日において讀解力を養

うために發音などはかまつて入られぬとばかり、はじめの數時間でアルファベットの讀み方を教え、文法や讀本の發音と言う項を音讀し、Umlaut や ch, r などの説明を少し行つて直ちに語形變化や文の譯讀に入るのが實狀である。私ははじめの時間において發音について長々と説明するのがよいと主張するわけではないが、正確な發音に習熟させるように絶えず氣を配る必要があると言いたい。およそドイツ語の文法を正しく覚え、語の意義を正確に把握することを望むものが、言語の最も外側な形式であるとは云え、發音を疎略にできる道理がない。第一學年の前期の答案の中に、zwölf を zwelf, zwolf, twelf と書いたものや、gewesen を gewesen と記したものがあつたり、獨文専門課程のものでも Luther を Ruter, Rutter などと綴る者が居たりすると、發音の基礎を欠いた者が多いことを如實に感ぜしめられる。

それでは我々は學生にどの程度の訓練を行うべきであらうか。この問題はドイツ語教師たるものが自らどのような努力を行うべきかと言うことと切りはなして考えられない。教師の努力は自ら正確な發音を習得するように心掛けることと、言語音についての體系的な知識を持つことであり、この兩者も互いに關連しあっている。

II

およそ發音の習得は耳を通して語音をききわけ、調音の様式を觀察しながら同種の音を發しようと試みることによつて行われる。端的に言えば模倣による。従つて良い發音の教師が授業を擔當すれば自ら學生の發音がよくなることは論を俟たない。現在では授業時間の少いため、或いはクラスの人員の多いために十分な接觸は行われないうらみがあるが、それにしても初級の讀本や文法の例文は自己の發音に従つて讀ませるのであるし、それ以後の譯讀においても、教科書の文を生徒の前に讀んで聞かせない教師はないはずである。多くの學生にとっては教場での教師の朗讀が、發音されたドイツ語の模倣となるのだから、考えて見れば大へな事だ。すなわち我々自らが機にふれて發音を良く

しようと努力することが怠れない。

一體我々自身がドイツ人を満足させる發音の習慣を獲得できるものであろうか。この間に對しては慎重に答えなければならない。

Jespersen は名著 „Lehrbuch der Phonetik“ の序において、自分が論ずる語音の現象は大ていの場合その土地の人が満足するほどに模倣し得たものだけであると述べている。だがこれは語音の觀察に熟達し、その上模倣の術にも絶妙な人に限られるのであつて、割に上手だと言われる發音の域では、その土地の語音に精通した人によつて容易に差異を指摘されるであらう。

我々が他國語の發音を容易にものにするのができないのは甚だ深い所に原因があるのである。そもそも個人が母語を習得するのは家族（ことに母親）の言語の模倣に始まるのであるが、満3才前後になると、それまで不完全であつた發音が正しくなり、文法體系のあらましが形成される。かくして満12、3才ごろになると、文法體系は固定し、日常の基本語彙が大方獲得され、音聲器官は容易に変更することのできない習慣運動を營むようになり、音韻の體系が確立される。この年令以後は他の土地に移住した場合、語彙などの使用で影響は受けても音韻の體系（アクセントを含む）が變ることがないのである。従つて語音について特別な注意が拂われない限り、外國語の音韻も類似していると思われる母語の音韻をもつて悉くおきかえてしまうことになる。そのことは國語に入つたおびたゞしい數の借用語彙の読みかたが示している。

このような次第であるから、我々が成人して外國語を口にするときに、母語の發音運動の型を全くすてて、外國語の調音様式に従つて音聲を出そうとすることが容易ではないのである。たゞ母國語の調音と大いに関はなれた音聲については、これを聞き分けることができれば、かえつて注意が集中するために、努力次第で原音と同種の音を發し得るようになる場合が多い。たとえば英語の [æ], [θ, ð], [f, v], [l], [r]（精密表記では ɹ）の如きは國語の音韻體系中に同種の音が存在しないが、習得できないものではない。ドイツ語の場合でも母音における o・u の Umlaut, 子音における [f] [v], ach-Laut [x], [ɪ]

(註1)
 [r] なども同様である。これらを完全に習得して他の音種と混同することがなければ、英國人やドイツ人に最低限の満足と與えることになるであろう。そして學生は綴りと發音との關係を知ると共にせめてこの程度の音の習得は努めるように訓練される必要がある。

厳密に觀察すると、母語の音と同種の高と目されるものでも、言語が異れば調音點が多少異なるのが普通である。たとえば簡略表記において共に [t] を以てあらわされる英獨語の t は閉鎖の位置に差があり、ドイツ語では舌先と前齒の齒莖の前部との間で閉鎖され、齒裏閉鎖音である國語の [t] に近く、典型的な齒莖閉鎖音である英語の音とは可成音色が違っているし、ひとしく [l] で表わされる側面音も英語では語末や子音の前ではいわゆる dark-l [l] となつて現れるがドイツ語ではそのようなことはない。國語とドイツ語との場合を例にとれば、簡略表記では [u], [o] (精密表記では [ʊ], [ò]) と表はされるウ・オが、(註2)ドイツ語の u, o に比べて著しく圓唇の程度が弱いことが容易に認められるし、普通 [ʃ] で表わされるシの子音に比べて、ドイツ語の sch は圓唇化が目立ち、調音點も異っている。概括的には同音種と言えても調音上相當の開きがある場合には、当該言語の發音を習得するのが第二の段階であり、語學の教師たるものはせめてこの域には達していなければならない。これは觀察と試みの努力によるのであつて、肉とチーズを常食としなければできないと言うすじ合いのものではない。

だが發音の問題は外國人が區別している單音を修得すればすむのではなく、單音の結合の仕方、アクセント、文調 (Intonation) においても正確を期さなければならず、努力の場面は甚だ廣いのである。

單音の結合の仕方について見れば、國語の音韻論的音節の構造は、單獨の母音音素や成節的な撥音・掟音の場合を除くと、子音音素+母音音素か、母音音素+半母音素+母音音素と云う形式であられ、現實の音聲においては東京方言のように無聲子音間に含まれた母音イ・ウの脱落の結果として子音が連続する場合もあるが——草 [ksa], 鹿 [ʃka], 人 [çto], 蓋 [øta] etc.——京都、

大阪をはじめ多くの方言においてはこのような脱落が行われぬ。従つてドイツ語の子音の結合を読む場合に軽く母音を入れて読む傾向が甚だ多く、語末の無聲子音の後でさえも母音をつけ加えることが稀ではない。

stark, spät の st, sp が [ʃut-], [ʃup-] と發音され, höchst, lachst の chst が [-hisuto], [-hasuto] となる類。^(註3)これは英語の習得の場合にもあてはまる注意であり、そこで不注意であつた結果とも言えるであろうが、教師は自らかかる點に留意するのみならず、ドイツ語の音節構造とは餘りにも異つたこのような傾向の排除に努め、子音はまずそれだけ單獨に發音し次いでそれが一定の結合において發音できるように時々注意を促して訓練する必要があろう。

アクセントについては強音の位置を覚えればよく、教師にとつては問題の少い所であるが、學生の中には eigentlich, arbeiten, beobachten と讀んだり、甚しきは ernst のに強聲を置いてエル^(註4)ンストなどと發音するものが居るから、主として語幹母音にアクセントの置かれるドイツ語の性質を學生に十分わきまえしめなければならない。

文調 (Intonation) は話者の意志・感情が反映した文の Melodie であつて、そこにあらわれる微細な變化を體得するためには、實際に會話が行われ、朗讀が行われる環境に長年の間身を置かなければならないであろう。従つて今日のドイツ語教育の面においては最も顧みられない所であるが、それにしても言語一般に通ずる法則があるのみならず、一言語に特有な型が存在する。であるからドイツ語の文調は大體英語と同じであるとか、コンマの所で聲をあげ、終止符の所で下すとか、疑問詞があればそこを高く讀んで尻下りに聲を下げればよいと言う程度のことでお茶を濁してはいけぬ。

ドイツ語特有の weiterweisend な調子と abschliessend な調子、及びその結合が如何にあらわれるか、教師は基本的な語群或いは文型においてこれを認め、少くとも散文の朗讀において應用しようと努めなければならない。ことに weiterweisend な音群が英語に比して高い調子を持ちつゞけ、高低のカー

ヴの山谷が頻繁にあらわれ、それが音の強弱の交替と共にドイツ文の顯著な特色となつてゐることを辨えることは、教場において文を朗讀して見せる以上きわめて重要である。

この點については **Barker** の *A Handbook of German Intonation* において圖式的に示された表や、**Frau Wagner** が *Linguaphone* の新特集に吹き込んだ *German Intonation* (これには **Barker** が簡単に説明を附している) などが、我々に大綱を知らしめる所となる。人或いは言うであろう。生きた言語の實相は複雑であつてとてもこのような基本型で律しきれものではないと。しかしそれは基本型を修得し了つた人の言であつて、我々學生時代において文調について訓練を受けなかつたものは、まずその基本的な型を修得して應用しなければならないと考える。

III

このように論じて來ると、學生の發音を良くし、そのためには我々が努力しようとすることの反面には、我々がドイツ語の實相について體系的な知識を持ち、ひいては言語音一般についての相當な理解を持つべきであることが察せられよう。

そもそも我々は最高學府において „ドイツ語“ を教授の對象にしているわけである。従つて授業において訓練する所は初歩のことであり、或はい數多い項目の一部かも知れないがこれを教授するものは全般的に體系的な知識を——つまりドイツ語學上の知識——を持つべきであり、發音のように學生に對しては最も説明することの少いものでも、自らは體系的な知識を缺くことができず、提出された疑問に對してたゞドイツ人の口を見よだけではすまされない。ドイツ人であればすべて模倣すべき發音であるとは限らないように、言語音について(註5)の正當な理解の少いドイツ人教師の説明が妥當であるとは限らない。我々がドイツ語のどんな發音を以て外國語教育においてとりあぐべき正しい發音とするかの認定については一見識がいるし、國語や英語の發音と比較して説明する

を便とするならば、自分の言う國語や英語の發音とは一體誰が用いて、それがどのような體系を持つものであるかの知識を必要とする。

それでは我々はドイツ語のどんな發音を以て範とすべきであろうか。統一の規制が行われた舞台發音が、その特殊な目的の故にそのまま日常會話の範となっていないことは事實である。たとえば長母音・重母音や **r, l** の後に記された音節末の **b, d, g** を弱い無聲閉鎖音 $[b]$ $[d]$ $[g]$ と規定して **p, t, k** と區別したことは勿論のこと、舌尖の顫動による **r** や語末におけるアクセントのない **-er, -el, -en, -em** における **-e** 音の保持の主張が教養人の音聲言語において貫徹されているわけではない。しかしながら、舞臺發音も現實の音聲と全く無關係に存在しているのではなく、北ドイツの教養ある人々が高地ドイツ語を口語に用いた場合の發音の型を基礎としているわけであるから、その型を熟知した上、兩者の關係について正確な知識を持たなければならない。たとえば **ihr, er, Uhr, Ohr** などにおける **r** を $[ə]$ と發音しておきながら、末尾の **-el, -em, -en, -er** における **e** を何れの場合においても保つたり、アクセントのない **es** を $[əs]$ と發音しないで明瞭に $[ɛs]$ でおしとおすことはおかしいのであつて、舞臺發音における規則がどのように普通會話で弱められているか、若くは變つた發音になつているかを知る必要がある。

現在においては舞臺發音が指示された當時とは異り、發音の理想と現實との乖離はラジオの出現によつて大はゞにせばまり、そこにおいては **Bühnen-deutsch** の **künstlich** な點が除かれ、且日常の會話のみだれを整備した發音がきかれる。それが一應の標準的なものと見なされていることは新版リンガフォンの吹きこみなどから察せられる。

我々が教場で讀むものは日常會話體からやや離れたドイツ散文が多いが、それにしても小説には會話體があらわれるし、一方において韻文や戯曲體（これにも古典劇の如き韻文的なものと現代劇とでは趣きが異なるが）もあり、我々が音聲言語の種々相について理解を持つ必要がどうしてもある。^(註6)

既修の言語の體系と比べて文法や語彙を覚えさせることは、知識欲の盛な大

學生に向つて有効であるが、これは、發音の場合も變らない。たゞし國語のように實際の發音は方言の音韻體系によつてゐるものが多いものでは比較の對象をはつきりさせなければならない。言うまでもなくドイツ語の標準音を問題とする以上、原則的には國語の標準音を扱えばよわけであるけれども、教師自らの音韻體系が標準音のそれと一致していない時には、その差が如何なる點にあるか熟知していなければならないし、逆に標準語によつて語る教師といえども奉職する大學の所在している地方の音聲の實相について十分理解を持つべきである。

たとえば東北から北陸の一部にかけてひろく分布する中舌母音のイ・ウ [i̯] [ü̯] はドイツ語の音韻體系中に調音の類似する音を見ないものであるから、この地方の人々にドイツ語の i 音種・u 音種を説明する時は標準音や、近畿方言を母語とする學生に對する時とは自ら異つたものがあるはずであり、これらの中舌母音を持つ教師は勿論これをドイツ語の發音の中に持ちこんではならないのである。

國語音との對比においてさらに注意すべきは、國語においては同一の音素と解釋されて代替しても意義の混同を來すことのない二音がドイツ語においては一つの音素と見なされない場合である。すなわち國語（東京方言をはじめ多くの方言）においてはヒ、ハの子音は一種の *ich-Laut* [ç] であらわされるが、ヒは音韻論的には /hi/ と解釋されるものであり、個人の發音においてはよく聞かれるように [hi] と發音しても互に意義をとり違えることなく、訓練を受けない耳には同種の音にひびく。従つてドイツ語の *China, hier* を發音する場合に自己の習慣に従つて [çi : na :] [çi : r] と讀んだり又は [hi : na :] [hi : r] と同音で讀んでしまう。所でドイツ語においては h と *ich-Laut* は異つた音素である——*ich-Laut* [ç] は *ach-Laut* [x] と同一音素に屬すると解釋される——からこれを混同することは許されぬのである。また國語のザ行の子音は多くの方言において語頭では破擦音の [dz] であつて、母音間の [z] と共に同一音素 /z/ に屬し、普通はその差に氣付かれない。然るにドイツ語では [dz]

は現實の音聲に存在しないのであるから〔z〕で發音さるべき所にこれが現れた場合には大へん耳障りとなる。我々が發音に注意した積りで *sieben* はジーベンではない、ズイーベンだと云つても實は多くの場合において〔dzi : béN〕と發音しているわけであるからジーベン〔dʒi : béN〕と五十歩・百歩と言うことになつてしまう。語頭において〔z〕を發音するためには相當の訓練が要るが、これが〔f〕〔v〕などのように英語でやかましく問題とされないのは、語頭に〔z〕が立つ語がきわめて少いからである。ドイツ語の場合我々の習慣に従つて〔dz〕ではじめるくらいならば、〔z〕を無聲で發音する方がドイツ人の耳に自然にひびくであらう。^(は?)

厳密に言えば同一音素とは認められないが代替して意義の混同する所のない〔g〕〔ŋ〕もやはり同じような注意の要るものであつて、母音間におけるが行が鼻濁音の〔ŋ〕とならない方言の出身者は「謹嚴、淵源」等を〔kingèN〕〔èngèN〕のように發音するが、ドイツ語の *singen, bringen* の場合も〔-ingèN〕と読み、ドイツ人にとっては餘計な〔g〕を入れ勝である。一方母音間におけるが行の子音が〔ŋ〕となる方言（東京・京都など）の出身者はドイツ語の〔g〕にもこれをあて *Hegel, Schlegel* の *g* も同様に鼻濁音の〔ŋ〕でおしとおしてしまうことが甚だ多いのである。

英語との比較の場合でも、その對象が標準音として認められる英國南部方言の發音か、我が國で耳にすることの多いアメリカ英語のものか明瞭に心得ていなければならない。英語の辭書や文法に載せてある簡略表記による發音記號の表とドイツ語の辭典や文法書にある簡略表記の表をながめてそこに用いられた記號の異同によつて現實の音を論ずることは誤つている。

たとえば英語の *get, set* などにおける〔e〕は精密な表記においては〔é〕であつて、ドイツ語の〔e : 〕とは口の開き方も音色も異つているのに、簡単に同種と速断してしまつたり、*r* の如きはドイツ語では舌尖か懸壅垂の顫動音〔r〕〔R〕であり、英語では舌が口蓋にもち上つた摩擦音〔ɹ〕で調音の仕方が異つたものなのにやはり同音と見なす類である。間違つた説明をする位いならしな

い方がよい。しかしすでに英語というものを學び、その結果英語らしい調音を行うものが若干ある以上、せめて個人的にでもその誤りを指摘し、且納得のゆく説明によつて正しい發音を修得するように導き得るのが語學の教師のつとめであらう。

これらの點を顧りみると、我々は國語や英語とドイツ語の音韻の構造をわきまえ、且音聲の實相についての觀察を行い、發音修得上どの點に注意を促すかについての考察が怠れぬことが察せられる。そしてそれは究極において一つ二つの具體的（或いは個人的）言語についてのみならず、言語音一般についての體系的認識——すなわちその音聲學的・音韻論的研究に至らなければ十分でないと言ひ得るであらう。そしてこれもまた無限にひろい言語の研究の分野の最も基礎的な素養に他ならない。

勿論ドイツ語教育における目的は發音そのものの修得であるからそれが有効に行ひ得るならば如何なる手段をも使つてよろしい。實際問題としてはなかなか勵行しがたいことであるがリングフオンをはじめとするレコードの活用や外人との接觸によつて、一音一音でなく話し言葉の調子そのものを修得させるように心掛くべきであらう。その際教師は自らの發音とそれらの音聲と對比されることをおそれてはならない。

教育者としては生徒が自分の實力以上に達することこそ望ましいのだから、かえつてなるべく原音に觸れる機會を把むように奨勵すべきである。だがその場合にも、何れが望ましい發音であるのか、その原地人の調音が如何にして行われているか、當該生徒或いは自己の發音と原音の差が奈邊にあるか等の説明が明確に行えるようであればならない。

最後に授業における説明の不足を補うものとして參考書があげられる。發音の場合こそ目で説明を読んだだけでは不十分であるけれども、それにしても大學生にふさわしい體系的な知識を與えるものとして利用價值がある。

たゞし、残念なことには世上出版されたものを點檢すると、學生にとつて一應のてがかりとなる國語及び英語音の説明にあやまりを見出されるものが多

く、言語音の観察の不足を暴露している。また今日体系的に語音を語る場合に一寸でも觸れておかねばならない音聲學と音韻論の立場の區別に及んだものは神戸大學の内藤氏の著だけであり、この方面の訂正注意が促される次第である。

(註)

- (1) ドイツ語における [l] [r] の訓練もさることながら [f] [v] を下唇と上齒で調音するように嚴格に指示することが肝要である。これも英語でしつけられていれば何でもないが、多くの學生は前者を邦語の多くの方言において見出される兩唇の [ϕ] でおきかえて發音する。またドイツ語の標準高の w は [v] であるということ [vas], [ve : r] をベス、ベールと讀むものが多い。ドイツ語の場合は [v] は英語より摩擦性が少いのだからこれでは全然ドイツ人に相手にされぬであろう。またドイツ中・南部では [v] の代りに兩唇有聲摩擦音 [β] で發音するが、その場合 [βas] [βain] は邦語はワス、ワインに近く、むしろこの方がベを以てするよりはるかにましである。
- (2) 國語のウ・オは方言によつて音價が異り、東京方言に比べて京都方言の圓唇が目立つ。
- (3) 従つてよくドイツ語の雑誌や參考書に見られるメートヒェン (=Mädchen) と言う書き方などは多くの學生をあやまらせ、[mè : tohjèN—çèN] [me : tohjèN, —cèN] などとのあとに母音を入れてよませてしまう。そのくらいならメーチェンの方がましである。ドイツ語の -tç- は國語のチの子音程完全な破擦音ではないが、聽覺印象は近いものである。
- (4) 且てラヂオのドイツ語講座でも耳にしたことがある。ゲルマン語では r が成節的であることはあつてもアクセントを持つことはない。チエコ語では子音群よりなる語において r がアクセントの山を形成することがあり、色々な音聲學書に次の例があげられている。[strtʃ prst skrz krk]
- (5) 京大講師 Ch. Kaempf 氏は前舌母音の e と後舌の o に夫々3種の音があることを主張され、日本の初等ドイツ文法や讀本では夫々2種しか記されていないのは不可とされる。たしかに人によつては r の前の母音が多少ひろくなる傾向がある。[do : m] [tó : r] しかしその場合の [o :] [ó :] は別種の音として [ɔ] に對立するものではなく、そのようなことをいえば [bu : x] [dɔx] の [x] を [dax] の音と區別するために常に精密表記の $\underset{w}{[x]}$ を以てせよと言うことになり、初等の教授としては適當ではないのである。
- (6) Alfred Egan は A German Phonetic Reader の中において Lesesprache,

Umgangssprache, Vortragssprache の三種にわけた表記を行つているが、このうち Lesesprache はつゞく二つの中間で、我々の朗讀の參考になる。

- (7) ところで [z] を全部無聲で發音するなら、それに伴つて北獨の有聲閉鎖音 [b] [d] [g] も無聲化し [b̥] [d̥] [g̥] で發音しなければ現實のドイツ方言の型になりきらないから生半可なことはできない。